

《人間不在の防衛論議》

（作品成立の背景）

昭和五十四年（一九七九）「中央公論」十月特大号に「防衛論の進め方についての疑問」と題して発表、翌昭和五十五年「人間不在の防衛論議」と改題、他の論考と共に新潮社から単行本として出版。福田恒存全集七巻には当初の「防衛論の進め方についての疑問」として所収。

本論発表の経緯は昭和五十四年「文芸春秋」七月号に載ったロンドン大学教授森嶋通夫の論文「新『新軍備計画論』」とそれに対する関 嘉彦の反論「非武装で平和は守れない」が反響を呼んだのをキッカケに、恒存が以前から思っていた防衛論を軌道にのせる事を目的として発表した論考である。

「中央公論」所載の「防衛論の進め方についての疑問」には添え書きとして、日本の防衛論を正常な軌道に乗せる為に、われわれが徹底して考えなければならないことは何か。森嶋、関論争を初め、従来の論議に潜む自己欺瞞を剔抉する」とある。

（作品構成）芝居仕立ての章区分になっている

プロローグ 亡命者なればこそ言えた無抵抗主義

第一章 「文民統制とは何を意味するのか」

第二章 「秩序ある威厳に満ちた降伏」と「政治的自決権」

幕間 ー フォイエにて

第三章 アメリカカガ助けにきてくれる保証はどこにもない

第四章 このままでは最大の軍備をしても国は守れない

エピローグ 私は人間を信じない、しかもなお……

（各章の考察）

（プロローグ）

森嶋論文には二つの詐術が隠されているとして次のように指摘する。

（一）、標題の「新『新軍備計画論』」は、もともと海軍大将井上成美が日米開戦の約一年前の昭和十六年一月『新軍備計画論』という意見書を出し米英との建艦競争を戒めたものであるが、決して軍備無用論でないことを承知の上で今日の「新軍備計画論」の意味合いを込めて、新の一字を頭に重ねたもので、「日本国民に『米英鬼畜』への道をひた走った『狂える軍閥』の『悪夢』を想起させざるを、その『狂気』を抑えようとした井上成美將軍の亡霊を呼び出し、自説の軍備無用論の露払いをさせようとした」

（二）、沖縄戦時、玉砕を避けて一般市民に紛れ込ませた将兵が日本軍再上陸の時には必ず武器を取って立ち上がる電文を結んだその抵抗姿勢に感動したと言っているが、自分の無抵抗主義、敗北主義は単なる怯懦と無智の産物ではないと思わせるための芝居だ。

○ 森嶋氏の言いたいことは『もし敵が攻めてきたら、自衛隊及び日本国民は無抵抗主義に徹し、無条件降伏するに限る』と言うことで、それが最上の方法とする論拠を列挙しているが恒存に言わせれば「何れも詭弁、相互矛盾、観念的机上の空論、支離滅裂……事実に対する嘘を恬然と語っている。イギリスの文民統制の論述は悪質な例で、氏の論法の殆どすべては広義に言って「先決問題要求の虚偽」（前提を認める前に前提の根拠を先決問題として要求すべき権利を有する謬論のこと）」

○ 恒存にとって最も許しがたい事は、森嶋氏の無抵抗主義、敗北主義が本気ではなく単に俗受けを狙ったもので、その極端な主張が暴発しないように安全弁を計算しながら当たるといふ効果を先読みしていることである。

○ 本来なら黙殺していいが「子供が遊び半分に放った吹き矢で一人前の大人が失明することもある。放って置けない」ので反論するが、森嶋氏を相手に論争するというより、恒存の目的はそれをキッカケに日本の防衛論を軌道に乗せる事にあり「森嶋氏の無抵抗主義ほどいい鴨はない」と考えた。

○ 自分と同じように考えていた田久保忠衛氏の次の反論を（恒存は最も的確に森嶋の主張の政治的背景を見ていると評価。（本文①参照）

○ 関、清水速雄両氏の反論にも殆ど同意しながらも、なお重要な点を見逃しているとして、次のような所見を述べてプロローグを締めくくっている。

「国防の必要は確かに現実の問題で、その程度と方法は現象によって左右される……その在り方の問題は国家意識、国家観、詰り国家と個人との関係という人間存在の根源に繋がるものである。その意味で森嶋氏の主張」

が清水氏の言うように非武装中立論を空洞化したとは言えず、また関氏の反論が森嶋氏はともかく無抵抗主義そのものを葬るに十分であるとはいえないと思う。論理的にのみならず、現実論としても無抵抗主義は戦後の日本に根強く生きてきたのであり森嶋氏が論争に破れても、それはなお生き残るであろう。」

〈第一幕〉 「文民統制」とは何を意味するのか

(一) 「文民統制」という翻訳語の新漢字が持つている「あやふやさ」を森嶋氏は最大限に利用する。国防には軍隊が必要だが軍が適正な位置と規模を越えれば外敵から自国を防衛するはずの自国の軍隊から、今度は行政府、立法府を防衛する工夫が必要になってくる。シヴィリアン・コントロール(文民支配、文民統制)或いはシヴィリアン・シュプレマシー(文民優位)はその意図を示すだけでその方法、制度は各国まちまちで、この言葉が用いられ始めたのはヴェトナム戦争泥沼化に随い、マクナマラが軍に対する行政府の介入を主張してからだと言われている。

(二) 本来なら文と武は車の両輪の如く対等であるべきものだが、敗れて文民優位にしておくのは、武が兵器を専有、保管しているからだ、いくら文民優位にしておいても軍の暴走を完全に防ぎうる方法、制度は絶対に確率しえない。要は相互の信頼関係であり、軍の暴走は軍のみにその責めを帰しえず、文民優位の護符一枚で防げると思っているのは大間違で優位に立つ文民は軍と対等に渡り合える専門家でなければならぬ。

(三) 森嶋氏が言うイギリスの文民統制を可能ならしめているのは素人優先主義の思想があるお蔭とされているのは「口からでまかせの大嘘で、イギリスぐらい専門家尊重の国は数少ない筈だ」

(四) 『イギリスでは軍人ばかりでなく、その他の専門家も素人に牛耳られているから文民統制は決して奇異ではない』と誤解を招く主張をしているが、軍人が素人の文民に『牛耳られている』と言つても、その文民代表は大統領や首相であつて、その下に国防大臣と統幕議長が対等の立場で直属し、統幕議長は閣議、国防会議に出席する権限と責任を有し、直接大統領、首相に意見具申し得る。アメリカは文民統制の文民が大統領と議院に二分されているので、軍はイギリスよりも「政治的」に動かなければならない。

(五) 日本は国防会議に自衛隊の最高責任者である専門家の統幕議長はそれに出席する権限が与えられていず、首相の命により必要な時だけ出席する義務があるだけだ。さらに防衛庁には内局の背広組み、主として警察庁、大蔵省から出向の官吏が目付け役としてそんざいする。

(六) 森嶋氏の希望どおり、政府、与党も日本人は未だに文民統制に不向きな国民と見做し、世界に類のない武官排除の徹底的な素人優先主義を堅持している。

(七) 森嶋氏は無抵抗主義を唱えながら、自衛隊の地位を現状のまま凍結し、文民統制にすることを拒否している。政府も現状の自衛隊が文民統制以前のまま足踏みしている実情を曖昧にし、恰も文民統制の原理に即しているものの如く国民に思い込ませている。

(八) 防衛についての専門家でも、兵力、装備、軍事費について論じる人が多いが、それと次元を異にする最も本質的な問題である国家的、社会的地位についてその至みを匡そうとする人は少ない。それは凍結され、隔離され、監禁されたままである。

(九) 文民統制以前の現状を続けていたのでは、有事の場合、現地の自衛隊指揮官は独自の判断で独走せざるを得ない、それを防ぐ為に文民統制の態勢を確立してくれ、言うのが、来栖弘臣統幕議長の健全且つ謙遜なる要請であつた。それが誤解され、詰め腹をきらされた。

(十) 恒存が防衛大の卒業式で、恰も欧米流の文民統制にあるものと話し、彼等に軍人という専門職である前にまづ国民、文民、人間である、その自覚をもってもらいたい。それは欧米の文民統制下でも容易な業ではない。まして文民から特殊な専門職として除け者にされ、その専門家集団の檻の中に閉じ込められている現状では殆ど不可能に近い。森嶋氏はこの凍結を解き、通常の文民統制を実施すると軍の暴走が起きる、と予断する。話は逆で、除け者にされ監禁された現状をいつまでも続けていれば軍に限らず誰も一氣に憤懣を打ちまけ暴走したくなる。

(十一) 森嶋氏は「体制派の学者」らしく昭和初期の軍縮が逆に軍国主義を招いた故知に倣い、軍縮や廃止は行なうべきでないと言う。しかし彼に反論する人の大部分も同じように兵力、装備などの量の問題に捉われ質の問題を無視する。

(十二) 同じく「体制派の学者」の中でも猪木氏は今日の自衛隊が文民統制以前の状態にある事を承知の上で、国会の統制下に置く事を主張する。

(十三) 恒存は文民統制に関する限り国会議員にのみ文民を代表させるのは危険だ。アメリカと同じように行政府の長即ち首相と国会とに分散させるしかないが、奇異なことに我が国会は防衛費審議権を放棄している、という。

(十四) 森嶋氏の指摘は結局日本で文民統制が行なわれにくいのは武の弱点によるものではなく統制する側の文にその資格と能力がないからと言う事になるが果たしてそうだろうか。恒存は言う。それが無いのではなく、それを与えられたくないのだ。国会は主権在民を盾に自衛隊を其の統制下に置く能力と自信が無いのではない、ただ

自衛隊そのものを爆発物同様危険物扱いし、それに触れたがらないだけのことだ。

(十五) 勿論、「議員書氏も国民同様本気で自衛隊をニトログリセリンの如き危険物とは考えていない。そこが亡命文民森嶋氏と違う、しかし憲法と自衛隊法に火がついたら大事である。彼等は日陰者の私生児を入籍させることによつて夫婦喧嘩で夜も日も明けぬようになり、家庭の平和を素す危険を何よりも惧れているのである。」

〔第二幕〕 「秩序ある威厳に満ちた降伏」

田口

これまで森嶋氏の無抵抗主義、敗北主義の二点を集中攻撃。しかし、窮鼠猫を嘯むレジスタンスが予想されるので、次は氏の『隠れ家』を爆破することにしよう。

(一)、ヒットラーが和平交渉の手藁として利用するために中立国スイスへの攻略を控えた例を挙げ、

「『日本も米ソの仲介役を果たせるように中立国を目指すべきだ』と氏は言う。

他の中立国で悲惨な運命を辿ったルクセンブルグやリヒテンシュタインの例に敢えて言及しなかったことは不十分な事例から結論を導く『不完全帰納法』だ。

武装、非武装を問わず、仲裁能力が問題、氏が目指すべきだとする『産業構造を転換、敵国が占領しても戦略上得にならない、あってもなくてもいい』国』になつてから非武装を盾に中立宣言したところで世界中から見向きされない、そんな国が米ソの仲裁国になれるわけがない。

(二)、『ソ連が日本に攻めてくることはまずない』。理由として、氏は神島二郎氏の説を援用。

（戦後世界で戦争や紛争の起因となつたのは、（1）建国それ自体に無理がある場合（イスエール、キプロス他）、（2）国境が陸続きの場合（中ソ、ヴェトナム、印パ他）（3）同盟国に侵略される場合（チェコ、ハンガリー）以上三点に限られる）

見落としている点。ソ連が他国内に親ソ分子を送り込み混乱状態を醸成、革命と言う名の代理戦争によつて、その国を侵略或いは衛星国化することも形を変えた戦争と言える。

論点相違の虚偽として、過去数千年の歴史を無視し、戦後三十年を絶対視しても、（1）（2）（3）のように戦争が起こつたのはかくかくの場合だつたという過去の事実を帰納的に列挙しただけで、それをもつて戦争の起因をかくかくの場合という普遍的命題にすり替える事は出来ない。

過去三十年の経験的事実は、多少とも考慮すべき確率の問題であつて、三割程度の的中率しかない。それなら、米ソが海を隔てて戦うこともありうるという三割程度の予想に基づいて、外交、国防を考えた方が遥かに現実的だ。

(三)氏は無抵抗主義の範として江戸城明渡しにおける勝海舟の態度を称揚し、『祖国を守る際には、妥協すべき点では妥協し、屈服すべき時機には屈服する勇気を』『勝海舟が江戸城を明渡しことによつて徳川家を救つた』と。

これは論点変更の虚偽。祖国は日本国全体であり、それを徳川家と同一視するのは論理的に筋が通らない。

勝によつて救われた徳川家も『威厳に満ちた降伏』によつてすべてを失ひ、八百八町は焼けずに残つたとしても『政治的自決権』は得られず、江戸っ子は負け犬、日陰者になり、江戸文化は衰退の一途を辿つた。

『米軍の沖繩上陸の段階で終戦していれば、どれほど多くの人命が助かり、市や財産の焼失を免れ、伝統文化を失わずに済んだか』

江戸の町民や八百八町が焼かれずに手早く終戦処理の手を打つても江戸の文化は滅びたではないか。

『米軍の沖繩上陸の段階で終戦していれば・・・』は『日本人は後世に誇るに足る品位ある見事な降伏をした国民だから戦後奇跡的復興を遂げた・・・』という部分は明らかな論理矛盾だ。

(四)『現在ではタンクやミサイルのようなハードウェアではなく、外交や経済協力や文化交流のようなソフトウェアが国を守っている』

文化で国は守れないし、文化は国を守る手段ではない。戦前の軍の暴走は西洋化、近代化の過程において異質の文明、文化に接することによつて起こつた適用異常の現れ、その意味で戦後の平和主義、民主主義に対する過信も・・・そのお蔭で経済面のみ肥大化し西洋先進国に比肩するに至つた経済主義の暴走も適応異常の現れだ。

『威厳に満ちた降伏』などと言う道徳と政治、経済との混淆は近代的思考の産物の防衛―ハードウェアに対する戦後の日本のソフトウェアが適応異常を起こした好見本だ。

(五)日米安保条約について氏は言う。『日本単独で日本を守りきることは出来ない。』『アメリカの助けがない限り日本は安全ではない。しかし、アメリカは必ず助けてくれるかと詰問すれ

It. I hope so としか答えようがない。安保条約があつても同じだ。」

「アメリカ人もソ連人も信じておきながら安保条約に疑念を持つのは矛盾ではないか。」

「米中国交樹立によるソ連封じ込めの作戦をソ連は苦々しく思っているから、こういう事態では日本は逆にアメリカとの距離を「少し」開くような心がけ、中立化の傾向を強くして、米ソ間の緊張度を下げるよう努力すべきだ。」

日米間の距離を「少し」開くのは「少し」という逆轉を用意した論法だが、中立化傾向の強化も米ソ間の緊張度を下げることとも不可能であり、『ソ連が日本に攻めてくることは「まず」ないと信じている』の「まず」も同様の逃げ道と受けとめられ、結局、森嶋氏はアメリカとの距離を「少し」開く程度でアメリカを強力な後ろ楯にしておけば、ソ連が日本に攻めてくることなど「まず」ないという対米依存心を表明しているに過ぎない。

右の点を関氏も清水氏も指摘しなかったが、両氏自身もアメリカの日本へのコミットメントを信じつつも不安を抱いているからではないか。

関氏「緊張の場合、アメリカが救援に駆けつけてくれるよう……経済摩擦の最小化、文化交流による相互理解の増進、日本も自国の経済力に応じた自衛力を持つことである。同盟国といえども自ら戦う意志も力もない国を助ける為にアメリカ青年の血を流すほどお人よしではない、しかし、そのような用意のある友好国を見捨てるほど無慈悲な国ではない……」

志水氏「自由世界をアメリカと協力して守ろうとする日本の熱意が重要。日本が自ら守り、アジアの防衛に関し、その国力にふさわしい責任を果たそうとするとき、それはアメリカの利益にもなり、日本を核攻撃から守ろうとするアメリカの決意を益々強固にする……アメリカが救助にくるかどうかを心配する前に、日本がアメリカにとって防衛せざるを得ない国になる条件を作り上げることの方が大切だ……」

1

右に対する疑問
(1)「アメリカが救援に駆けつけてくれるよう」現在の日本はたして真剣に努力しているかどうか、「自ら戦う意志」や「自由世界をアメリカと協力して守ろうとする熱意」を持つているかどうか。「意志」や「熱意」の表明だけなら容易だが実効はない、……表に現れた形、具体的な方策が肝心だ。

(2)アメリカが防衛せざるを得ぬ国としての条件とは何か。貿易問題などアメリカから文句が出ない限り、日本が自主的に考えようとしないう、その受身の姿勢、しかもそれはなるべく触れまいとするタブーになっていること。

朝野を挙げての、この自己欺瞞を打破せぬ限り、防衛論議はいつまで経っても正しい軌道に乗らないだろう。

第三幕 アメリカが助けに来てくれる保証はどこにもない

防衛に関する論者の論理性、言葉の用法、その整合性や正しい使い方の観点から、森嶋氏の見解や、同じ考え方にたつ関、志水、衛藤各氏、さらに日本の新聞、当時の保守政治家（中曾根、宮沢氏）等の論理の不合理性、言葉の曖昧さや矛盾、欺瞞性、且つそのような論法を用いる心の働きや態度を鋭く突いて「日本を助けに来てくれるに値する国にしようと言う意図の表明だけでアメリカ人が日本を助ける為に彼等が血を流してくれるだろうか」恒存は問う。

例えば

(一) 森嶋氏が「私は人間を信じてるがゆえにアメリカ人と共にソ連人を信じてる」といつておきながら、『日本人による文民統制能力を信じてない』と言う。また他方で『われわれは南ヴェトナム、韓国、台湾が、ニクソンやカーターに煮え湯を飲まされた事を忘れてはならない……少なくとも将来十年間は、アメリカの青年が日本を救うために、銃をとることは絶対に信じない』という。この「信じてる」は「半ば信じてる」の意味合い、「信じない」は「半ば信じない」で、「半ば」と「絶対」とは矛盾し、絶対に相容れない。

このような軽率、曖昧なる、或いは欺瞞に満ちた用語法によって事を論つても、結果は不毛であるばかりか、いたずらに混乱を招くだけだ。

(二) 一 関氏の《自国の経済力に応じた自衛力》また猪木氏の《JNPの一パーセント位の軍事力を》も同じく、曖昧で何かごまかしがないか。

資源も蓄積も無いわが国のJNPを過大視は出来ないし、他国に較べ衣食住に金が掛かり過ぎる。兎小屋の働き氣遣い。にならざるを得ぬ国民所得も実質的には大幅に割引して考えねばならない。

(三) 一 衛藤氏《金だけで防衛力は賄えるものではない。要は自衛隊が真に精強であり、国民の「骨」として「イ」決して外にあらわれないが、しかし国の独立を支える大切な要素になり、(ロ) 民衆の中にがっちり組み込まれていることである。そのためには人員は量より質で、現員よりもっと少なくすべきであろう。》

この「イ」と「ロ」は明らかに矛盾する。「骨」は外から見えないからレトリック・比喩としては矛盾を感じないが《民衆の中にがっちり組み込まれている》という以上、「国家的、社会的に正当に位置づけられ、入籍され、天下晴れてその文民統制下にある自衛隊ということになれば《決して外にあらわれない》では済まされない。」

また《金だけでは防衛力は賄えるものではない》人員は《量より質》だとしても、それだけの理由でいきなり《現員よりもっと少なくすべきだ》との結論は倉卒で論理的に飛躍し過ぎ。兵力の軽減は量の問題で、質の問題ではない。《精強》ということは質の問題に違いないが、その意味の質なら量の問題に還元し得る。《民衆の中にがっちり組み込まれている》という自衛隊のあり方、あるいはその目的、役割こそ何よりも検討の急を要する真の質の問題である。

今更それを問題にせねばならぬ異常な現実を、このような抽象論をもってなお回避しようとしている実情こそ最も検討を要する異常な心の働きである。

(四) 一 志水氏《自由世界をアメリカと協力して：その国力にふさわしい責任を果たそうとするとき》これは「するならば」と言う仮定の話法、つまり仮定法過去。現在の事実と反する前提条件を以てアメリカに対し《それはアメリカの利益にもなり：》と、希望的観測を相手に押し付けても何の効果もない。

《アメリカが救助にくるかどうか心配する前に：》こう言い換えるべきでは、「アメリカの救助を心配する前にアメリカにとって防衛せざるを得ない国になる条件が作れるかの方が心配」と。その必要条件をみたすためにどうしても直面せざるを得ない障礙に目をつぶっているが、ただその必要を説くと言う、この種の防衛論議が多すぎるのが問題。

(五)

一九七三年、ニクソン政権はウオターゲイト事件で満身創痍の状態にありながらヴェトナム戦争終結に全てを賭けていた。結果論だが、米議会はヴェトナム問題についてはニクソンの能力を信頼し、それを充分利用してからウオターゲイト事件の罪を責めて彼の追いつきとを計った、といえる。日本の新聞の大部分はアメリカのヴェトナム介入を非難、その撤退の為のハノイ、ハイフォン爆撃にまでけちを付け、戦争終結を歓迎、その一方でウオターゲイトの時はまるで国内問題のように扱い日本の運命には直接無関係の内政問題を連日詳細に報道した。

政府自民党の中にもゴジンジェム政権を《気遣いのような政権》(中曾根)、宮沢は《政府とか何とか言えるもんじやない》と公開の席上で口走り《アメリカはよくそのような間違いをする》とペ平連並みの事を口にした。さらに宮沢は三木内閣の外相の時ワシントンで《アメリカは日本を守る義務がある》その確認を求める》と言ったら新聞が大々的に採りあげたが、それはヴェトナム戦争終了後アメリカがアジアと日本を見捨てるのではないかと言う不安が出てから大きく扱ったわけで、しかし、それなら何故あれほどヴェトナム戦争に反戦姿勢を採り続けたのか、また、政府の対米追随外交を非難し、日米安保条約に反対し続けたのか。

(六) 一

「日米両国民に訴える」で自分が会った殆どのアメリカ人が、日本を守る義務など感じていない事を改めて思い知らされた、と書いたが、全くと言っていいほど無視された。

無視されるほど日米の連帯感宿命的なものだという暗黙の依存心が日本人の心を蝕んでいることが大問題だ。前述のヒース、バインダー両氏の言葉を想起すべきだ。

「エドワードケネディ大統領候補との対談で、アメリカにとって日本が必要なのは何のた

めか、という質問に対して「それはマーケットとしてであると」と答えた。さらに彼は防華条約について「台湾に危機が迫ったとき、アメリカはそれを助けるかどうか、議会で審議する義務がある、という程度のものだ」と言った。ただ乗り安保の日本となれば、それだけの労を採ってくれるかどうか甚だ疑問だ。

(七)

関、志水両氏が「最小限の軍備」の必要を説き、防衛の為、自衛隊が二週間持ちこたえる事が大事だ、と言っていることは理解できない。文民統制が大統領と議会に分散しているアメリカに日本ためソ連と戦う決断を下せ、期限は二週間と限つたら、答えは「ノウ」と出るに決まっている。また助けたい相手が西洋にせよ日本にせよ、いよいよ助けると決意するには、その国が助けるに値するかどうかと言う判断によると同時に、いやそれ以上に助けに駆けつけるだけの効果があるかどうかと言う戦況判断による。そのために日本は二箇月三箇月と持ちこたえねばならない。

アメリカにとつての日本の戦略的価値の重要性をいう人が多いが、それは単に平時の現在に於ける地政学的位置によって固定的に計りうるものではなく、戦争が始まってから後の戦い方によって流動し変化する。こういうところにも確率論の陥りやすい罠がある。

第四幕 このままでは最大の軍備をしても国は守れない

一九五三年(昭和二十八年)、池田、ロバートソン会談(池田、宮沢等参加)で日本は経済優先主義を貫きアメリカが要求した陸上自衛隊三十五万を十八万にたたいて手を打った。高坂正堯氏が「我々の考え方で日本の安全保障政策を決めることが出来ると言う独善的な考えを捨てて、軽武装のドグマから転換しなければ」と説いているが、賛成だ。しかし、たとえ、重武装しても、それだけで根本的な問題は解決しない。

いくら巨費を以て兵力、装備を増大強化し、士気旺盛の《精強》を集め得たとしても(二)「専守防衛」の自衛隊に真珠湾攻撃やプリンス・オブ・ウェイルズ撃沈の夢を託すわけに行かず、防衛、自衛に徹して、しかも敵の攻撃を抑えろというのは、自衛隊に大横綱相撲を強いるようなもので、『よほど強大な軍隊でなければ、一度は土俵際まで退却した後、逆襲に転じるというような落ち着いた戦いは出来ない(森嶋氏)』

専守防衛である以上、領海、領空外まで深追いする事も禁じられている訳だからだ。(限定された領域内で専ら受けて立つ組み手しか許されない状況ではまともな戦いは出来ない)

森嶋氏の右の文脈からしても氏は軽装備の軍備では文民統制は不可能である事を指摘し重装備への転換を「暗示」しているとは思えない。関、志水氏は森嶋氏の真意を読み損なったのではないか。

(三)「金で兵器、装備は賄える、しかし、その乗組員、搭乗員はどこから手に入れるのか。唯一の頼みは予備自衛官だが、日進月歩の兵器に適應する技術、訓練と言うことになれば、素人の文民をいきなり徴集してもどうにもならない。第一、日本文民政府は国民から徴兵することは禁じられている。国民に納税、子弟教育の義務はあっても国を守る義務は全く無い。

ビスマルクが言うように「必要の前には法律は無い」のだから、いざと言うとき日本人は進んで銃を取る、と樂觀論を唱える人がいる。

しかし、これには陥穽が二つある。(1)、昔と違って兵器が単純な操作で扱えるものは無く、大部分は精密な機械化が施されていて、ずぶの素人に手におえるものではないし、小隊を指揮する士官の養成には最低三年は掛かる。(2)、森嶋氏が自衛隊を《無用の長物》と考えながら、急にこれを縮小、もしくは廃止すると危険だと考えるのも、目下のところ、それは「要らない平時に要る」もので、敵が攻めてきていざとなったら不要な存在と見ているからだ。「必要の前に法律は無い」と言う装飾用の法は、文民統制そのものを否定し、軍の暴走に最上の口実を与えるだろう。

(3)国民の自由意志であろうと緊急措置の戦時徴兵制によろうと、今や急ぎしらの兵士は役に立たず、とても(精強)などといえたものにはならない。

(三)「アメリカは徴兵制度と志願制度とを交互に切り替えているが、大学に於ける軍事教練

だけは未だに行なっていて、志願者数が収容人員を常に上回っている。

(四)

アメリカの青年には自国を守る意志と情熱があるらしい。日本にどうしてそれが無いのか。平和憲法という「カード」の小屋に手を触れたがらず、触れれば崩れるのではと懼れているからだ。与野党の政治家や官僚のみか大学教授もサラリーマン、文士、ジャーナリストも、もし疑似インテリとしての体裁を保ち、仕事仲間から村八分にされたくなければ、飲み屋でこれを話題にすることはタブーになっている。

その精神的硬直がアメリカに反映しないわけがない。

それなら、日本は自己の防衛は金で買うべきだと、アメリカは考えているのである。しかし、日本の一部では「GNPパーセント位の防衛費」とか「無用の長物自衛隊は税金と思えばいい」「国連分担金を増やしたらい」とか言っているが、何れも憲法と言う「カードの小屋」を毀したくないからだ。

△本文読み▽

…安保の乗り逃げを金で済まそうとする事は大学裏口入学の賄賂や女子学生の売春に等しい

(五)

「ケネディのみならず、アメリカの有識者、政治家の中に、敢えてその事を黙認しておこうと考える人がかなりいる。

世界に一つしかない武装放棄の平和憲法に梃子搾りながらそれを現状のまま温存し、安保ただ乗りを許しておこうと言うアメリカ側の動機、或いは意図は、

(1) アメリカが日本に与えた物だけに、それを逆用されても文句が言にくい。

(2) 改憲、再軍備を要求すれば、自民党内閣の政権保持は不可能になる。

(3) 日本が再び軍事大国になり、そのナショナリズム、ミリタリズムがアメリカを劫かしかねず、それ以上にアジアの近隣諸国に大きな不安を与えかねない。

しかし、これは私的な話で、両国の政府と政府が、真剣にこの問題に取り組んだことは一度もない。民間の学者、知識人の公式会議でも、これはタブー、野暮な話として討議の対象になつたことはない。

ロレンス・イー・カーン氏（東洋史専攻の経験あり、妻が日本人）の言。

「日米両国は同じ土俵にあがっているが、今まで一度も四つ組んだことがない。ペルリ以来、両国の関係には長い歴史があるが、その間、真剣になって四つに組んだのは、唯の一回、それは太平洋戦争だった」と。そして、ほとんど全ての日本人がアメリカが日本を見捨てないと固く信じていることは実に不思議だと。公開の席上でこれほどはっきりいった例はない。

(六)

「日本国憲法は、日米両国が互いに都合のいい時だけその陰に素顔を隠すために利用：憲法を盾にした安保ただ乗りも日本が「経済大国」になるために都合だったし、アメリカもそれを許していたが、いつまでもそのままと言う訳には行かない。

しかしアメリカの本音は、もしかするとただ乗りさせて置いたほうが、いつでも「気楽に」手が引けるし、その方が捨てやすい、と考えていたのではと、勘繰りたくなる。

(七)

「日米合同演習の問題。現憲法下では自衛隊は（専守防衛）で、海外派兵は絶対出来ぬはず。その自衛隊が米領ハワイ沖まで出動し（専守防衛）等頭のない米軍と合同作戦が出来るか、これは明確に文民統制からの逸脱。国防会議が諒承したものなら文民政府は違憲の罪に問われねばならない。

(八)

「経済と国防の関係。貿易戦争を単に経済の次元で処理し得ると考える現象論が一般の風潮。しかし経済と国防とはあくまでセットとして取り扱うべきだ。既に古典的独立国という概念は米ソ対立の二極構造の世界では完全に消滅した。「政治的自決権」といっても、広義に解釈して寛大なるアメリカの核の傘の下ですら、日本はそれをもっていない。

△本文読み▽

…我々に可能なこと、なすべき事は時に応じて自ら「自決権」譲る自主、自立の態勢をつくり、その相手を選ぶ判定、決断の能力を備え、その共通の地盤の上に立つて、互いに利害を異にする現象をどう裁くか、妥協の手段、方法を協議することだ。

(九)

「日米関係、防衛問題について立場を同じくする人々が何故憲法を素通りして済ませられか

自分の言動は恰も最も自分を信じているかのごとく振舞う。この恰もというのは、人格の統一体を仮説と考えていると言う意味。

(仮説) — 科学、哲学(或る事実、または現象の原因を統一的に説明、或る理論体系を基礎付ける為)に実際の証明を待たずに仮に前提とされる命題または理論、↓観察、実験によって検証されると仮説は一定の限界内で妥当する真理)。

虚構 — フイクション ① 現実にはない事を想像力によって作り上げること

← ② 小説などの作り話

(事実) — 仮説・仮定

← 観察実験による証明

← 真理

(三) — 鵬外 — 最も西欧的思想を身につけた文士の一人

① 西洋的思想 — 人格も仮説と見る

② 日本人の習慣 — 物事を自然発生的に見る(人間関与の度合いが薄い)
彼は①②の適合に悩む

西洋 — 自分も人間も放っておけば手におえない代物。各個人の欲望を適度に抑え、それぞれの衝突から生ずる混乱をまとめていく為に国家が必要。

国家の統一のためにガヴァン(統治、支配)するガヴァメント(統治者、支配者)が必要、ガヴァンするものの欲望とガヴァンされるものの欲望が衝突するのを規制する法が必要。

一般の日本人 — 自分の子供が戦争に駆り立てられ、殺されるのがいやだからといって戦争に反対、軍隊に反発、徴兵制度を否定する。

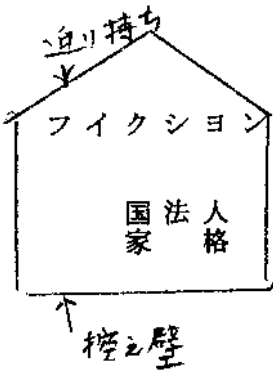
母親の感情

← 父親 — 理性的 — 論理の筋道を立てて、国家と言うフイクションの成立の為徴兵もやむを得ぬと考える。その制度もフイクションとして認める。

父親の人格(国民としての仮面・親としての仮面)の二役を一人で演じ分ける。

仮面の使い分けを一つの完成した統一体としてなしうるのが人格。

(四) — フイクションの枠 — 迫持ち、控え壁(防衛 — フイクション) — 枠の崩壊を防ぎその維持の工夫をしなければならない



(五) 森嶋氏の独断

『国防論では仮定の敵国を明示しなければ焦点が定まらぬ』

— 国防は一国を仮定の敵国とはしない。国際情勢の変化で、あらゆる国が仮想敵国の可能性があり、封建時代には「男子、家をいざれば七人の敵あり」のことわざが生きていた。儒学

にはフィクションの思想があつた。

① 近代官僚制度・教育制度・議会制民主主義 (ソフトウェア)

フィクションと考える ←

ソフトウェア ←

ハードウェア ←

憲法 ← フィクション

『堅固な建造物 これに適応、維持すべく努力すること』 人格を形成

② 本来の憲法

日本国憲法 ←

虚像 ←

欠陥車、手抜き工事の楼閣

カイドの小屋・砂上の楼閣

自衛隊合憲 ← 無理な適応 ↓ 人格の崩壊、精神の頹廢を招く

「どこの国が攻めてこなくとも、なし崩しの防衛論は日本と言う国と国民個々の人格と言うフィクションをなし崩しに腐坑化し、いくら森嶋氏の無抵抗主義に反論しようが、結果としてそれに手を貸し、日本国民の洗脳に寄与することとなろう」。

(了)